

白い壁



小城ゆり子

(1) 精神病院保護室

(1) 精神病院保護室

目が覚めたら、私は白い壁に囲まれていた。目を開けて見ると、三方が白い壁に囲まれている狭い部屋で、私は、その一角に置かれている白いベッドに寝かされていた。枕元には一つだけ窓があったが、そこから外を見ても、狭い枯れ木の庭しか見えなかった。他は建物ばかりである。

いったいここはどこだろう？

夢に見た故郷、あのA温泉の新しい病院だろうか？

しばらくの間、私は不審に思って、考えていた。今の今まで天国にいて、そこは懐かしい故郷だったのだ。なぜここは天国みたいでないのだろうか？ なぜ私の知っているA温泉ではないのだろうか？ なぜ私は壁に囲まれているのだろうか？ ここは天国ではなく、現実の世界だろうか？

ガチャン、と、鍵を開ける音がし、白衣を着た女性が部屋に入ってきた。なぜ白衣？ なぜ看護師？

「おはよう」と、この女性が挨拶する。「やっとお目覚め？」

私は彼女に聞いてみた。「ここはどこですか？」

「病院です」

「病院？ 天国の？ それとも……」

「まあ、天国？」と、彼女はふふっと短く笑った。

「天国なんかじゃないわよ。安心して。ここはB市の病院です」

「B市の……。現実なんですね」

「そう、現実です。あなたは三日も眠り続けて、やっと目が覚めたんです。目が覚めて良かった」

B市の？……。三日も眠り続けて？ それでは、あれは昨夜ではなく、三日前のことだったのか？……

一ヵ月ほど前から、私は情緒不安定になっていた。通院していた野木沢クリニックから二種類の薬をもらっていたが、その一種類の方の副作用で腎臓を悪くしてしまい、その薬は無しになった。で、薬が他の一種類になってしまい、それが少なすぎたのだろうか、だんだん不安になってきた。自費出版などして、興奮もしていた。自分が偉い作家になったような気がしていた。いい気になって、気持ちが高ぶってきていた。

いつもこうなのだ。物事がうまくいき始め、どんどん想念が浮かんできて、自分が世界を良い方向に変えられる、自由の女神かジャンヌ・ダルクになったような気がしてくる。何もかも自分の思い通りになるようで、べちゃくちゃおしゃべりを始める。興奮がひどくなってくる。いつものことだった。

夜、眠れなくなった。眠らないで、騒ぐ。

夫にクリニックに連れて行かれた。

「千草病院に入院した方がいいですね」と野木沢医師が言う。

「紹介状を書いてあげましょう」

「やっぱり入院しなきゃダメですか？」

「ダメですね。千草病院でも嫌ですか？」

「いえ……あの、千草病院にはちょっと興味ありますが」

「じゃ、決まりだ」

千草病院は、マスコミでも知られた、評判の良い精神病院である。私は一度そこへ入院してみたかった。

だから入院を承知したのだが、その千草病院へ行くと……。

私を診察してくれたその医師は、ただ今現在、千草ではベッドが空いてないと言う。同じB市の高橋病院に行けと言う。

なぜ急に高橋病院に行け、なのか。私はわけがわからなくなった。ただ高橋病院が嫌なことだけはわかっている。それなのに、タクシーに乗せられ、高橋病院に着いてしまった。ずっと前にここに入院させられ、酷い目に遭っているのだ……でも、私はもう、その医師の前にいる。

医師は椅子に座っていた。

「私はどうしてもここに入院しなければなりませんか？」と聞くと、医師が、

「そうです」と言う。

「待合室で待っていてください」と言われた。

待合室から、私はさっと逃げ出した。

「私、ここは嫌！」

夫は黙って付いてきた。

B市から、JRで家に帰る。

夫と二人、家に入ったら、とたんに屈強な男たちがどどどーっと玄関に入ってきた。挨拶もなく。

わが家の前で隠れて待っていたのだ。

「病院からお迎えに来ました」などと言う。

「よけいな世話だ！」と夫が彼らを外に出す。

他の病院を探す？……これから他の病院を探せるだろうか？ 千草病院には断られたし……しかたないかな、と私は観念した。ここはやはり高橋病院に入院するしかないのではないか……。

私は夫に連れられて、また家を出て、B市に行こうとJRの駅に向かった。

と、駅頭で、男たちが私に襲いかかってきた。どどーん！ いきなり夫から私をもぎ取って、車に引きずり込み、拉致する……。

ここは駅前交番のはす向かいだった。すぐにパトカーが追ってきた。

「橋川正造さんの妻、橋川裕子さんが、誘拐されています。その車、停まりなさい。裕子さんを返しなさい」パトカーがマイクで呼びかけている。夫もパトカーに乗って、追いかけてきているらしい。

車はどこへ行くのだろうか？

なぜか、私はあまり怖くなかった。常軌を逸して、もう何が何だかわからなくなっていた。故郷のA温泉に行くのだろうか？などと理由もなく考えていた。

道々、うっそうと茂った夜の暗い林の中に行く。男たちの車と、パトカーと。冬のことで、あたりはもう暗くなっていた。

灯りが見えた。

「あ、車は高橋病院の中に入って行きます」パトカーがそう放送し、停まったらしい。

男たちが私をわしづかみにして病院の中に引きずり込み、バタバタと病院の看護師たちが私を取り押さえ、当直の医師がとんできて私に注射しようとした。

「嫌！ 嫌！ 嫌！」私は抵抗した。

男たちに拉致されて、私は恐怖と不安におののいていた。誰でも、こんな目に遭えば、恐怖し、興奮するだろう。だが、その医師は、精神科医師なのに、その場面を一切考慮しようとはせず、絶対必要なはずの診察もせず、それどころか私がいったい何者なのか確かめもせず、太い注射をした。

「止めて！ 止めて！ 実験台にしないで！」と私は叫んだが、医師は大声で、

「実験台だ！」と叫んで、ブスッと私のお尻に注射した。

その瞬間、私は意識を失った。

故郷は雪で覆われていた。雪の中を大通りが一本、通っている。少女の頃、よく通った道だ。ずっと行くと、いつも見慣れていた看板が出ている。「ようこそ、暖かいA温泉へ」と書かれている。ヤッホー。

私たちは、映画のロケ隊だ。私の書いた原作の映画を撮りに来たのだ。いつの間にか私は有名な作家になっていた。私の故郷、A温泉を舞台に映画を作って、日本中の皆に知らせるのだ。

高校の友だち、俊子が庄屋のおかみさんを演じている。大勢の農民たちがそれぞれの訴えを持って並んでいる。

「はい、お次！」と、俊子は、次々と訴訟の答えを簡単に出し、ぽんと判を押す。ぽん！ ぽん！ ぽん！

年配の紳士が、私に言う。

「あなたは、私に会いたかったんですね」

この人は、私が、高校時代、ストーカーみたいに追い掛け回していた馬場さんの叔父さんだ。叔父さんは、世界各国を廻り、国や企業に頼まれた調査をしているという話だった。馬場さんは、この叔父さんを尊敬し、自分も同じ仕事をしたいと、東大経済学部を目指していると言っていた。

私はこの叔父さんに会いたくて、それで馬場さんを追い掛け回していたんだろうか？ これが私の本心だったのか？ わからなかった。当時は気がついていなかった。

しかし、なぜこの叔父さんは、私が前に外来で診てもらっていた井上先生の顔をしているのか？ 井上先生は私を好いてくれると、当時、私は勝手に考えていたものだったが。

もう一人、昔私と文通していた友人の西田さんがそばにいた。

「彼女の気持ちには気がつきませんでした」と西田さんが言う。

気がつかなかったって？ いったい、何に？ 馬場さんや叔父さんのこと？ 井上先生と会う

前に……。

私は西田さんが好きだったのだろうか？ そうだったのだ。当時は気がつかなかったのだ。馬場さん、西田さん……遠い高校時代のことである。

ロケ隊がA温泉を撮影し終わって、去って行く。

私は取り残された。そうだ、ここはA温泉ではなく、天国なのだ。私はあの酷い注射で命を失ったのだ。

コケコッコーと鶏が鳴いた。

「あれえ！」と私は鶏を追いかけて行く。

ちょっと目を開けた。

すると私のベッドの周りに、医師や看護師みたいな人たちが大勢……私を取り囲んで、心配そうに見ている。これって私の臨終？

これから私は死出の旅に出るのだろうか？……

天国も、現実世界も、大したことなかった。つまらない。私は半ばふてくされて、眠くなり、また目をつむる。

そうして、また何日かたって、朝がやって来たのだ。私は白い壁に囲まれた部屋にいた。

そうか、ここはB市の高橋病院なのか。私はあの男たちに無理に連れてこられ、当直の医師に注射され、気を失っていたのだ。A温泉のことは、夢だった。夢？ 臨死体験というのだろうか？ 確かに天国に行っていたように思えるのだが……。

それにしても、大嫌いな高橋病院に入院させられ、私はやはり負けたのだ。負けた？ 何に？ わからない。運命に負けたのか？

ここは鍵のかかる部屋。保護室と呼ばれる精神病院の独房である。看護師はまた、ガチャンと鍵をかけて出て行った。

白い壁が私を取り囲んでいる。ここから外へは出られない。閉ざされた狭い空間。私がこれまで何度か入れられた精神病院保護室。

少したって私は尿意をもよおしたので、ベッドから降りて、トイレを探した。

出口の横にトイレがあった。扉で仕切られている、和式の水洗トイレである。

が、いったいどこを押せば、水が流れるのか？ それがわからない。

あちこち触って、「呼出」というボタンがあったので、押してみた。が、何の反応もない。二、三回押してみたが、反応がない。もちろん、誰も来ない。どうやっても水が流れない。このトイレ、壊れている、と思った。

あきらめて、ベッドに戻り、ぼんやりしていたら、またガンと鍵を開けて看護師がやって来た。朝食を運んできたのだ。

「このトイレ、壊れているの」

と言ったが、看護師は何の反応も示さない。

「ご飯、食べなさい」と言って、また鍵を閉めて出て行った。

朝ご飯のおかずは、ぬるいみそ汁と、漬物、佃煮ばかりであった。

しょうがないから、食べた。

またまたダンと頑丈な鍵を回し、看護師が朝食を下げにやって来た。

「薬、飲みなさい」と命令する。

薬について、何の説明もなく、ただただ強制的に飲ませることばかりなのは、どこの精神病院でも同じである。そして、これを拒否したら、もっと恐ろしいことをされると思えるので、いつも、しかたなく、おとなしく薬を飲んできたのだ。

薬のせいで、眠くなった。

目が覚めて気がつくと、今度はなんと私はベッドに手も足も身体も太い紐で縛りつけられていた。手も足も動かすことができない。老人病院の拘束と同じであった。

老人病院では、老人が点滴の針を抜こうとしたりして、危ないから、拘束する。ここではいったい何のために拘束するのか？ もちろん点滴などしていない。

しかし、何しろ私はすべてわけがわからなくなっていたから、ここは老人病棟で、私はもう六十代になっているので、拘束されているのだと思った。

何日もたって、夫がここに面会に来たが、私は縛られたままだった。

後に夫が言ったところによると、夫が、なぜ妻をベッドに縛り付けておくのか聞いたら、担当の坂月医師は、「暴れるから」と答えたそうだ。

「うちのは、大きな声は出しますが、暴れることはありません」と夫は言ってくれたが、医師は取り合ってくれなかったという。

「暴れる」ってどういうことだろう？ トイレの呼出ボタンを押したことだろうか？

頑丈な鍵で閉鎖してある部屋で、不必要な拘束をして、もし万一火事にでもなったら、死ぬしかないではないか、と私は恐ろしかった。

右手も左手もベッドに縛り付けて、このままではご飯も食べられないので、食事のときだけ少し手の紐を緩めてくれる。この状態で何日も拘束されていた。

私は自分でも気がつかなかったけれど、ひどい排泄障害になっていた。尿も、便も、出ない。何日も出ない状態が続いていた。

看護師もそれに気づかず、だが血圧などは測りに来るのだ。

何日かたって、血圧を測るとき、看護師が、

「おしっこウンチは？」と聞いた。

「そんなもの、出ません」

「えっ？ いつから？」

「いつからって、ずっとです。だって、これではトイレにも行けないじゃありませんか」

「あ、おしめをしなくちゃね」

看護師はやっと気がついて、紙おむつを持ってきた。ほんとに老人病棟だ。

しかし、紙おむつでは、尿も、便も、ろくに出ないのだった。まったく出なければ、それこそ病気になっていただろうが。

ここでは、尿が出ないというのは、導尿をした。便が出ないというのは、浣腸をした。なぜそんなややこしいことをするのか？ なぜ自由にトイレに行かせてくれないのか？ まあ、後にはそう思ったけれど、このときは、この拘束を私はそうつらく思っただけではなかった。

私がつらかったのは、ノートと筆記用具を取り上げられていることだった。

脳裏に様々な物語が浮かんでくる。ほんとに次々と空想が浮かんでくるのだ。で、それを書き留めたいと思う。でも、書く道具を取り上げられている。

食事や薬のたびに次々と来る看護師たちに、いくら「紙とボールペンを持ってきて」と頼んでも、誰も聞いてくれない。

看護師たちは胸のポケットに何本もボールペンをさしているのだ。でも、「貸して」と頼んでも、貸してくれない。

別に借りなくたっていいのだ。ちゃんと持って来たのだ。私の持って来たカバンの中にそれらはちゃんと入っているのだから、荷物を返してくれればいいのだ。なぜ、人の荷物を、勝手に、ことわりもなく、取り上げるのか。

「書く紙と書く道具とを持ってきて！」

と、いくら頼んでも、どの看護師も、

「もっと落ち着いたらね」

と言うばかり。

何でわからないのだろうか？ 私は書くことを禁じられているから、その分、脳裏に浮かんでくる物語を、声に出してしゃべることになるのだ。おしゃべりするなど看護師たちは言うけれど、そう言うほうが私に無用なおしゃべりをさせているのではないか。おしゃべりしないで落ち着くためには、書かなければならないのだ。いったいこの洪水のように浮かんでくる物語をどう処理せよというのか。

落ち着くためには書かなければならないのに、ノートもボールペンもないから、口でおしゃべりするしかなく、落ち着かないのに。

落ち着かなければ筆記具はやらないなんて、この人たちは原因と結果とを逆に考えているのだ。これではいくら時間がたっても、解決のしようがないではないか。

私は物語を心の内に留めておくことができないでいた。

この部屋の天井から、トン、トン、と音がする。

話さない、あなたの思っていることを、あなたの作っている物語を、話してごらん、と促すように、トン、トン、と音がする。私が話し始めて、少し黙ると、また、さあ、その次は、とトン、トン、と音が促す。声が聞こえてくるのではないけれど、音がそのように感じられる。

さあ、その話はどうなりました、あなたはやっぱり小説家ですね、面白い話、もっと聞かせて、と音が促すようだ。

あの時と同じだ、と私は思い出す。あの時、もう二十年以上も前のことで、この高橋病院はまだ改築されておらず、保護室も板張りの部屋だったが、その時、やはり天井からこのような音がした。

あの時と同じだ……。

そして今、面白い話ね、それでその話はどうなったの、その続きはどうなるの、とうるさいくらい。先生が聞いている、と私は思った。音がそんな風に感じられるのだ。うるさい。

たまりかねて、看護師に言った。

「あそこに機械をしかけて私の話を録音しているでしょ」

先生が録音して、聞いているのだ。

看護師が言った。「そんな人権じゅうりんはしていません」

あ、そうか。

私は気がついた。そうか、そんなことをしたら、人権じゅうりんになるのか。

天井の音が私の話を促すように聞こえるのは、私の気のせいかな、勝手にそう思っただけか、と納得する。

保護室というのは、鍵のかかる独房で、少なくとも私の知っている限り、どこの精神病院にもある。入院してまだ日が浅く、ここの環境になれない患者とか、興奮して手がつけられない患者とかを、入れておく部屋である。通常は二、三日しか入れておかないのだが、なぜか私はここに長く閉じ込められることが多かった。

恥だった。こんな部屋に閉じ込められるのは、屈辱であった。何か悪いことをして、罪を得ているのだろうか。娑婆で悪いことをした覚えはないが。

看護師がガチャン、ガチャンと頑丈な鍵を開け閉めする時、「お前は精神異常者だ！」と天から宣告されたような気がする。不当に扱われている！

いったい何のために？　なんで私だけこんな目に遭わされているのか。なんで私だけこんな白い壁に閉じ込められているのか。いったい私が何をしたというのか。

興奮を鎮めるためと医師は言うかもしれないが、これがほんとうに興奮を鎮める方法なのだろうか？

看護師がまたガチャガチャ鍵を閉めて出て行くとき、抗議した。

「閉じ込めたって病気が治るわけないでしょ」

そうしたら、次の答えが返ってきた。

「刺激のない空間」

刺激のない空間……。

そう、確かにこの部屋は白い壁に囲まれているだけで、他には何もない。あるとすれば、枕元に置かれたキャビネットばかりで、その上に置いてあるティッシュペーパーの箱にかわいい花模様が描かれている。この花模様だけが夢で、他には何も夢見るものがない。

夢見ることの許されない空間……。白だけで、何も色のない狭い空間。しかし……？

ここで私は、夢ばかり見ているのだった。現実が何もないみたいなので、よけい、夢や空想が多くなる。

ここを遮っている白い壁。

壁は刺激にならないのだろうか？

実世界からシャットアウトされた、無機質の空間。ここには、真実、何の刺激もないのだろ

うか？ 保護室と呼ばれるこの精神病院の独房に、どんな刺激もないというのだろうか？

(2) 戦争と平和の中で

(2) 戦争と平和の中で

昭和十八年十月六日、私は今はさいたま市の一部になっている浦和市で生まれた。戦争中だった。軍需工場の研究員だった父は出征しており、四歳年上の姉も叔父に連れられて父の故郷、新潟に疎開していた。まもなく戦場ではないはずの日本国土、銃後にもアメリカが侵略してくるという。嬰兒の私は母と二人、浦和で暮っていた。

昭和二十年三月、東京大空襲。東京は火の海となり、壊滅的な打撃を受けた。大勢の都民が犠牲となった。

その後、首都圏のみならず、日本中の都市が空襲される。もちろん首都圏への爆撃も続き、五月には浦和市も空襲される。母は、浦和市は何もない、ただの住宅地だから、アメリカも空襲しないだろうと、高をくくっていたらしい。嬰兒の私と二人、平和な生活を送っていたのだが。

アメリカは、容赦しなかった。

空から襲ってくる爆弾と火の海を逃げ惑った母。私をしっかりと負ぶって。

逃げる……逃げるといっても、いったいどこへどう逃げるのか？ まったくわからぬまま、逃げ惑って……途中で、母は、死んだ母親の背中で泣いている赤子を見たという。あ、母親が死んでも子供は生きていることもあるんだな、と母は思い、少しだけ安心したという。

爆撃の音が遠くなって、はっと気がついた母は、背中の私を見た。その時、私は目をぱっちり開けていた。この子は、この間中、ずっとこうして起きていたんだらうか、と母は思ったという。

眠ることなどできるわけがない。泣いたか、泣くこともできなかつたか、わからないが、私はものすごい恐怖に襲われ、ただ母の背にしがみついていたのだらうと思う。嬰兒にはそれしかできなかつたはずだ。この恐怖が私の原体験である。

爆撃されても、国鉄は動いていた。で、母は、それに乗って、新潟に逃げた。列車の旅も、おそらくぎゅうぎゅう詰め、つらかつただらうと思う。排泄も食事も自由にできなかつたはずである。

都市は、日本中、火の海と化していた火の海と化していた。

そして、沖縄に上陸したアメリカと、日本とは、悲惨な沖縄戦を繰り広げる。

投降することを許されなかつた沖縄の住民は、アメリカ軍に殺された。逃げられた人はほんの少数だった。

八月六日、新型爆弾（原爆）が広島に落とされる。たった一発の爆弾で、一瞬のうちに広島は壊滅した。

次いで、九日、今度は長崎に原爆が落とされる。これが二発目の新型爆弾。

三発目の原爆は、新潟に投下される……はずだった。

新潟は空襲もされたが、その後、もっとひどい、新型爆弾が投下される……という噂が流れた。市民たちは、知事から疎開を命じられ、あたふたとあわてていた。なぜ三発目は新潟、とわかつていたのか？ 空からアメリカ軍がビラ（伝單）を撒いたのか？ それは不明であるが……。

その時、母と私は、新潟市郊外の田舎に住んでいた。祖母たち父の家族の許に、身を寄せていたのだ。八月半ば、市内から親戚が逃げ延びて来た。なんだか知らないが、これからものすごく恐ろしい新型爆弾が落ちる……という。

ここは田舎だから大丈夫だろう、と母たちは考えたらしい。それ以上逃げなかった。逃げる場所もなかった。

もちろん、ひとたび原爆が落ちれば、こんなすぐ近くの郊外など、市街と一緒に罹災したはずであった。私も、母たちとともに、被爆したはずであった。しかし、三発目の原爆よりも敗戦の方が早かったのだった。

八月十五日、天皇陛下のいわゆる終戦の詔勅が玉音放送として全国民に伝えられ、戦争は終わった。

私たち一家は助かった。

が、嬰兒の私に敗戦、終戦とはどういうことか、わかる道理もない。

私の心の中では、あわただしい恐怖の季節がなおも続いていた。

家の近くに小学校があって、ときどき、サイレンが鳴る。サイレンの音は、空襲を連想させる。それが鳴ると、私は、泣き喚いて母の背にしがみつくと。泣いて、泣いて、泣き止まない。

「大丈夫だよ、裕子ちゃん、もう戦争は終わったんだよ。空襲はもうないんだよ。平和が来たんだよ。もう何にも心配いらないんだよ」

と周囲の大人たちが、いくらあやしても、すかしても、私は泣き止まなかった。

そういう子だった……と、母が、語った。

P T S D（心的外傷後ストレス障害）であった。当時はそういう言葉や概念はなかったが。

戦争に行っていた父が帰ってきた。その後、父は新潟市の師範学校の職を得たが、組合活動などやり、朝鮮戦争当時の赤狩り（レッドパージ）にひっかかってしまい、失職した。

女子高等師範を出ていた母は、自分も働くことを選び、仕事探しに奔走し、県内の自分の故郷、A温泉で中学校教師の口を見つけた。で、私たちは、祖母たちと離れ、A温泉に引っ越した。その近くで、父の新しい職場も見つかった。

その後、日本では平和が続く。

私の心的外傷後ストレス障害はやがておさまったが、不安はなおも続いていた。

死の不安。誰でも、人はいつか死ぬ。私も、死ぬ。死ぬと、どうなるのだろうか？ 死の世界。何もない。魂とか霊とか、それがあるとは思えない。そんなものはないのだ。私に宗教はなかった。肉体が死ねば、精神も同時に死ぬ。後には何も残らない。死後、そこには「無」しかない。無の世界。何もない世界。何も考えず、何も感じることもない、自分というものがまったくくない世界。私は恐ろしかった。まだ子供なのに、そんなことばかり考えていた。

雨が降る。

雨が怖い！ この雨は、死の灰（放射能）を地上に撒き散らしているのだ。

昭和二十九年三月、アメリカが南太平洋ビキニ環礁で、水爆実験を強行した。水爆は、広島・長崎級の原爆の一千倍以上の威力を持つ。当時、ビキニ付近でマグロ漁をしていた日本の第五福竜丸が被災、船員たちは死の灰（放射能）をあびた。

五月、日本本土に降った雨から、放射能が検出された。

九月、第五福竜丸の無線長だった久保山愛吉さんが死亡した。

死の灰の恐怖が日本中を覆った。

学校から帰る途中、雨が降り出した。傘を持っていなかった。あわてて私は家に向かって走り出す。

「裕子ちゃん、どうしたの？」

一緒にいた同級生のふしぎがる声が追ってくる。

「雨が、死の灰が、降ってくるのよ！ ぬれたら、原爆症になる！」

逃げたかった。死の灰の降ってくるような、こんな日本ではなく、どこかもっと安全な所に逃げて行きたかった。

私は雨を恐怖していた。

学校で教師たちが映画「ヒロシマ」を上映した。私たち生徒は、原爆の恐ろしさを教えられた。

原爆の悲惨さ……言語を絶する苦しみの中で死んでいく人々……母が新潟にも原爆が落ちるはずだったと語った。赤子のとき、私も被爆していたかもしれない……。恐怖が押し寄せてきていた。

昭和三十七年、私は東京に出て、大学に入り、ソ連核実験反対闘争に参加した。だが、共産党の人たちが、

「ソ連核実験は自衛のため」

と私たちに敵対してくる。こちらが何を言っても、ガンとして主張を変えない。私はがっかりしてしまった。

ソ連は労働者の国……その国が、なんで世界の労働者の肉体を侵すのか？ そんな権利がどこにあるのか？

当時、アメリカとソ連とは核実験競争を繰り返して、「冷たい戦争」をしていた。

もし核戦争が勃発したら？……

不安が胸をつんざく。核戦争と放射能が恐ろしい。

世界は真っ暗だった。世の中が恐ろしく、不安で、ゆううつでたまらない。

私はうつ病になっていた。

戦わなければ！と私は思った。この世界を正しくしなければ！ うつ病から立ち直った私は、学生運動に参加し、今度は躁病になる。昭和四十年のことである。

ベトナム戦争が続いていた。

アメリカのテコ入れしていた南ベトナム政府と、ソ連・中国・北ベトナム側のベトコン（南ベトナム民族解放戦線）との戦争が、際限もなく続いていた。

ベトコンの執拗な抵抗に業を煮やしたアメリカは、北爆を開始した。北ベトナムを空から爆撃したのである。

日本ではベ平連（ベトナムに平和を！市民・文化団体連合）が誕生し、この他に左翼の学生運動も活発化し始めていた。

秋。十一月、大学は学園祭でにぎやかだった。政治的な催しの多い、左翼的な学園祭である。講演会や討論会もにぎやかだった。その中で、私は学生新聞の編集の仕事をしていた。新聞の仕事だから、もろに学生運動の波をかぶる。自治会を牛耳っている革マル派と、新聞部の中核派との党派闘争にまきこまれ、私はぐちゃぐちゃにされていた。

にぎやかな学園祭。革命が来る！ と私は錯覚した。そうだ、日本に、平和革命が来るのだ。人々が理解しあい、協力しあうことで、理想の社会主義社会が作られるのだ。革命が来る！

私は妄想にかられて、はしやぎ始め、おしゃべりを始めた。世界が全部、自分の思い通りに動いているように思えた。夜も寝ないではしやぎまわった。

両親があわてて、病院を探し始めた。私は単身、東京の大学に来たのだが、その後、両親が首都圏に引っ越してきて、私たちは一家で生活するようになっていたのである。

海に見える丘の上に建った、四季折々の花で囲まれた病院、C市の田中病院。裏には色とりどりのバラがいっぱい咲きみだれている。ここのバラ園は有名で、一般には公開されていないが、医師会の人々などはよく知っている。見る人は少なくとも、花の手入れは行き届いている。それでも、植木職人が手を入れるのはほんの仕上げだけで、いつもは病院の患者たちが手入れしているのだ。病院側が作業療法と称して患者にやらせているのだが、もちろん、労働の対価は正当には支払われない。

門から花壇を通過して待合室に行く、その道は細かな玉砂利が敷き詰められており、さながらどこかのお邸に行くような……そんな錯覚をおこさせるような病院である。鉄格子に囲まれた豚小屋のような病棟は、木々に遮られて、見えない。私が二十代の頃、入院・退院を繰り返していた病院である。

ここの「保護室」は、狭い板張りで、せんべい布団と、便器が一つ、置いてあるだけ。その上、昼間は電燈がつかないので暗く、本を読むこともできず、夜はこうこうと明かりがつく。患者が明るくて眠れなくても、睡眠剤を飲ませるから大丈夫、患者を管理しやすいようにしている。

躁病になった私は、この保護室に入れられていた。

少したって、大部屋に移されたが。

食堂を兼ねたホールは、狭く、ごたごたしている。

病室は扉がなく、廊下との間に仕切りがない。部屋にはぎっしりとベッドが並べられ、まるで豚小屋である。そして、ここも、昼は暗く、夜はこうこうと明かりがつく。ここでも睡眠剤を飲ませ、無理に寝せる。患者に自然な眠りを取り戻す力をつけさすなど、医師にも看護師にも念頭がない。

若い頃、私はこの病院に入退院を何度も繰り返していた。躁とうつを繰り返かえして立ち直れなかったのだ。

それは、昭和四十七年頃のことであった。私はここで、同じ病気で入院していた年上の友人、中原田君子と出会った。

この田中病院を、彼女は、「理想の病院だ」と言う。

「あたしの入っていたD市の病院は、地獄だったよ。狭苦しい所に患者がぎゅうぎゅう詰めになれ、言うことをきかない者は鎖で柱に縛り付けられて。医者は全然やってこない。若い師長がいぼっていて、それが院長の妾なの。あたしの夫が医者に病名を聞いたら、精神分裂症だって言うの。もう手に負えない精神分裂症だって。診察したこともないのに、そう言ったの」

「手に負えない精神分裂症って、それ、なあに？ そんなもの、あるの？」

「ないと思うけれどね」

「そうよ。医者がそんなことを言うの、不見識じゃない」

「そうでしょ？ それに、私はほんとに精神分裂症だったのかしら？」

「診察もしないで、医者が勝手に付けた病名になって、こだわる必要ないわよ」

精神分裂症……差別に満ちたこの病名は、現在は使われていない。現在は統合失調症というのだが、この当時は皆、精神分裂症とって、怖れていた。

「そうだわねえ……でも、私は悩んだ。そして、そこの病院では、面会室に看護師が付いてきて、監視しているの。ほんとの気持ちも、そこがどんな病院かも、言えないように監視しているの。でも、あた

しは主人に言ったわ、ここを出してくれ、お願いだからここを出してくれって。あたしはそう言い続けるもんで、いつも面会の後、看護師に殴られたけれど、でも、言い続けたの。それでも、主人は、お医者さんが良いと言ったらねって、いつも、その一点張りだったの」

「そこがどんな病院か、ご主人にはわからなかったのね」

「そう。でも、義理の兄さんが面会に来てくれたとき、私はこれがもう最後の機会だと思って、兄さんに必死で頼んだの。ここを出してほしい、他の所ならどこへでも行くから、出してくれって」

彼女の気迫に打たれたその義兄は、「君子さんがあんなに頼むんだから」と、彼女の実家に連絡してくれた。そして、君子の実家から母親が飛行機で飛んできて、彼女を引き取った。

「病院のみんな、祝福してくれたよ。良かったね、君子さん、退院できて。もう二度とこんな病院に来ちゃいけないよ、しっかりしてね、って言うてくれた。でも、私は家に帰れると思っていたんだけど、飛行機からタクシーで、直接この田中病院に連れてこられたの」

「……」

「ここは、いい病院だよ。あたしにとっては、天国と同じ。ご飯もおいしいし、お医者さんたちが診察に来てくれるじゃない。それだけでも、あすこよりどんなに良いか」

田中病院は、私にはとても良い病院には思えなかったが、君子はそう言うのだった。

それに一つ、この田中病院のわからないところは、退院の基準が不明朗なことだった。

最初の発作がおさまれば、家庭生活は送れるのに、ここでは、いつまでも患者を入院させておく。

良くなったのになぁ……と、私はゆううつになる。躁状態はすぐにおさまる。が、退院させてもらえず、それどころか、入院後二週間は、個々の病状にかかわらず、一律に面会禁止だった。

躁病がおさまっても退院させてもらえないため、だんだん、ゆううつになって、うつ状態がやってくる。躁とうつが繰り返すのがお前の病気だと言われても、これは病院によって作られたうつ病ではないか。

しかもそのうつ病が停滞すると、ふしぎなことに、ここでは退院させてもらえるのだ。

何か、いつも病棟を患者でいっぱいにしておけば病院側が経済的にうるおうため、患者の入退院を調節しているみたいだった。

お正月には、多くの患者たちが外泊するのに、いったい何がいけないのか、私は外泊させてもらえない。中原田君子も同じように外泊させてもらえず、で、私と彼女とは、お正月で閑散とした病院に取り残されてしまった。

お互いの話など、語り合う。

「セックスなんて、たいしたことないよ」などと、彼女は、大声で言う。

「あたしは主人と何万回もやったけどね」

そんな話も、躁病の彼女は恥ずかしいとは思わないのだ。私は未経験で恥ずかしいのに。

大声で彼女は歌う。

「股は夜、開く」

夢は夜、開く、の替え歌である。が、未経験の私にはよくわからない。

そしてまた、彼女のなんとかの一つ覚えは、「教育ママ反対」である。

「教育ママが、この日本をダメにしているんだ。子供の人生は子供のものだよ。一流大学だの一流会社だのと言って、子供を苦しめるのは反対だ。あたしは子供たちに、勉強しなさいって言ったことないよ」

「そうですか」

「あたしは教育評論家にもなれるね」

「教育評論家？」

あまりの突拍子もなさに私は驚いた。

「あなた、それくらいの考えで、ほんとに教育評論家になれると思っているの？」

「なれる、なれる」

「へええ…」

もうあきれて、二の句も告げない。

しかし、珍しいことではない。誇大妄想は私にもある。躁うつ病はそういう病気なのだ。

彼女は胸を叩いて叫ぶ。

「田中角栄は偉いんだ！」

「田中角栄？」

「あたしは角栄の妾になるんだ！」

「ええっ？」

「あたしは国会議事堂に電話したんだ」

「まあ！」

私は驚いた。誇大妄想は私にもあるが、しかし国会議事堂に電話するという発想は私にはない。

当時、田中角栄は飛ぶ鳥を落とす勢いの総理大臣だった。そして、大学を出ていないで首相になったので、『今太閤』と呼ばれていた。教育ママ反対の君子は、学歴のない角栄が好きになったのだろう。

「国会議事堂に電話したらね、秘書が出て、笑っているんだ。あんたなんか首にしてやると言ったら、どうぞ、なんて笑っているんだ」

「そりゃ、笑うわよ」

「なんで？」

「だって、おかしいじゃない、角栄があなたを愛人にしてくれるわけがないじゃない」

「どうして？」

「どうしてって、そんなこともわからないの？ 角栄ともなれば、女に不自由はしてないわよ。政治好きの五十女なんて、相手にしてくれるわけがないじゃない」

「そうかなあ？」

「そうかなあって、何言ってるの。それに、あなた、ご主人はどうするの？」

「離婚する」

「えっ？ 離婚するの？」

「そう。パパは偉い人だけれど、政治には関心がない。それが、あたしには、物足りなくて」

「ふーん」

君子には、ふしぎな魅力があった。教養があるとは言えないけれど……なぜか、人の心をひきつける

。

病院内で私は彼女と親しくなったが、彼女は、妹さんがやってきて、退院させ、連れていった。

「お光りで直しますから」と妹さんは言ったという。「お光り」という宗教で直すのだそうだ。

治療途中の退院なので、病院側は怒って、

「この病院はもう二度と中原田さんの面倒はみません」

と、つっぱねたという。

妹さんは、彼女が薬の副作用でひどい便秘に苦しんでいるのを、見るに見かねてのことだったらしい。便秘どころか、もっと酷い副作用があるかもしれない、とも思ったのだろう。私も、後に、この副作

用で苦しむことになる。

(3) 栄子、その愛

(3) 栄子、その愛

田中病院では、女子の病棟はA棟とC棟で、普通、患者はまずA棟に入院させられ、病気が軽快すると、新館のC棟に移してもらえる。A棟は古い、老朽化した建物だが、新しく建てられたC棟は、少しだけましだった。だが、部屋がきれいなのはいいが、広い病室に二十も三十もベッドが並べられていて、やはり患者がぎゅうぎゅう詰めにされ、プライバシーも何もないのは同じだった。

ここは、さすがに夜は暗い。

昼も、ホールの他は暗かったが。

私は中原田君子と離れ、ここに移ってきてまもなく、ある夜、夜中に出血に気づいた。女は、旅行のときとか入院しているときとか、人知れず悩むのだ。

あ、いけない、とあわててナプキンを探す。暗がり、自分の荷物を空けてみる。ごちゃごちゃして、どこにあるかわからない。ガサゴソしていると、隣のベッドの若い女が、声をかけてきた。

「どうしたの？」

「あ、あのう……」

「何を探しているの？」

「あのう、ナプキンを……突然、生理が来ちゃって。私、どこへやったのか、わからなくて……」

暗くてわからない。

「そう」

女は言って、自分のナプキンを出し、私に渡してくれた。

「これ、あげる」

地獄に仏。

「ま、ありがとう！」

感謝して、それを受け取り、トイレに行く。

やっと始末できた。

「ありがと、夜、うるさくしてごめんね」

寝ているところを起こしてしまった彼女に、わびを入れる。

この夜のことがきっかけで、私は彼女、小川栄子と友だちになった。

C棟には、長期入院者が多かった。

長期というのは、普通は二、三カ月で退院するのに、十年も、二十年も入院し続けているのである。病気が治らないのではない。とっくに治っているのに、退院できないのだ。退院しても、行くところがないのである。

家族が引き取ってくれないのだ。親が年をとってしまっているとか、兄弟姉妹が引き取らない

とか。身内がいったん精神病になどなった者は、世間体が悪く、恥なので、一生病院に入れて飼
い殺しにしているのだ。

社会的入院。当時は社会的入院という言葉こそなかったが、各地の精神病院には大勢そういう
患者が溜まっていた。

C棟の彼女らは、近くの文具工場でパートとして働いていた。夜は病院に帰る。夜だけの病院
。ここの院長の誇る『ナイト・ホスピタル』。彼女らは『ナイト』と呼ばれていた。

なぜ『ナイト』のままなのか？ 立派に働けるのに、なぜ退院させてやらないのか？ なぜ自
分自身の働きで自活するようにしてやらないのか？

吉田さと子は、『ナイト』の一員だった。彼女はいつもとても明るく、ここの環境に慣れてい
るようだった。

「退院したくないの？」と私が聞いても、彼女は、

「私、行く所ないもん」と言う。

「だって、ここには、結婚もできないでしょ」

「こういう病気になると、結婚は難しくなるの」

「そう……」

「でもねえ」と彼女は言う。

「私、ガン検診を受けたいの。でも、ここでは、胸のレントゲンくらいしかやってもらえない
わね。どうしたらガン検診を受けられるのかしら？」

それが彼女の悩みなのだった。精神病院に入院している者など、ガン検診は受けなくてもいい
、と思われているのだろうか。

湯川千里は、この病院の調理室で働いていた。料理の下働きである。いつもエプロン姿で忙し
そう。彼女も、明るく、はきはきした闊達な女性だった。

一度、彼女がホールで疲れたように休んでいたとき、聞いてみたことがある。

「あなた、退院したいとは思わないの？」

「退院？」

彼女は目を丸くした。

「退院なんて……あたしにはできない」

「どうして？ あなた、働いているじゃない？ 調理室で働いても
給料はもらえないの？」

「給料だなんて」

「給料をもらって、それで部屋を借りて独立すればいいじゃない」

「そんな……そんなにたくさんのお金、もらえるわけがないじゃない！」

彼女は怒っているみたいだった。

「あ、つまらないことを言って、ごめんなさい……。でも、いつまでもこんな病院の中にいるし
かないなんて、酷いじゃない」

「しょうがないわよ。これがあたしの運命だもん」

「運命？」

「そう。もう親もいないしね」

「親がいないって……あなた、なんで外へ出て自活する努力をしないの？」

「うるさいわね。あたしの勝手でしょ」

「ごめんなさい……でも、もしかしたら、あなたは、実社会に出て行くのが怖いんじゃない？」

と言ったら、千里は黙った。

しばらくして、ぽつりと言った「あたしの気持ち、あなた、よくわかるわね」

こういう社会的入院ではなくても、家族がほとんど面会に来ず、見捨てられている患者も多かった。面会者のある患者は、いつも、限られている。私のところには、父や母が来ていた。親が来てくれる患者は幸せなのだ。多くの患者は、親からも見離されていた。

そして、病院の許可する面会者は、親や兄弟姉妹、あるいは配偶者に限られていた。友人や知人は面会できない。

それなのに、看護師長の言うには、

「病人を受け入れてくれるのは、親だけね。兄弟姉妹になるともう疎遠だし、夫婦というのねえ……恋人ってのはダメだね。そりゃそうでしょうよ。自分が相手の立場に立ってみればわかるじゃない」

ということになる。

しかし、そういうことはあっても、現実に恋人同士を引き裂いているのは、ほかならぬこの病院ではないか。恋人は面会できないではないか。

手紙も……ここでは家族にあてた手紙は、投函してもらえるが、それ以外はもみつぶされてしまう。酷い話だが、病気の証拠としてカルテに張られてしまうことさえある。相手から来た手紙は、突っ返される。

犯罪人を収監する刑務所でも、こんなことはないだろう。前近代的な人権じゅうりんである。

栄子のところには、母親が月に一回くらい来るだけだった。

「これ、彼なの」

と、彼女は、私に母親の持ってきてくれた写真を見せる。

若い男性の写真……やさしくて線の細そうな、ハンサムな男性である。

「彼？」

「そう」

「恋人？」

「うん」

「ああ、恋人とは面会できないのね」

「そうなの」

「でも、お母さんの許した仲なのね」

「ええ、だから、手紙は、母が面会に来てくれたとき、母を通じてやりとりしているの」

「そうなの……」

恋人のいない私はうらやましかった。

「面会でできればいいのにねえ」

「ええ、でも、彼は待っていてくれるわ」

「待っている……そう、あなたの退院まで待っていてくれるのね」

「うん」

「まあ、うらやましい」

栄子は美人だし、魅力的な女性だ。うつ病になったという話だったが、ゆううつそうには見えなかった。

時を経て、栄子も、私も、田中病院を退院できた。そして、すっかり意気投合し、親友になった私たちは、外の喫茶店で会った。

「どうだったの？ 彼。やっぱり待っていてくれた？」

私はまず、それを知りたかった。

「もちろん！」

栄子はうれしそうだった。

「今度、彼と結婚するの」

結婚！

「まあ！」

精神病になると、結婚は縁遠くなる。私も、それで悩んでいた。でも、栄子の彼は待っていてくれ、結婚してくれるという。

「良かったわねえ。結婚してしまえば、もう、病院も、仲を裂けないもんね。良かった。あなたたちの愛が、病院に勝ったのね」

「そう。入院中、三カ月も私、彼と会えなくて、さびしくて……よけいうつ病になりそうだったけれど」

「そうよねえ。それがどうして病院の人たちにはわからないのかしらね？」

「うん」

「でも、良かった」

まるで自分のことのように、私はうれしかった。栄子の幸せがまぶしかった。

それなのに、

「でもねえ……」と彼女は何か悩んでいるようだった。

「えっ？ なあに？ 何が問題なの？」

「問題って、私……」

「え、なあに？ 彼のご両親が反対しているの？」

「ううん、そうじゃなく」

「じゃあ、いったい何なの？ どうしたのよ？」

栄子には、秘密があったのだった。

「あのねえ、聞いてくれる？ それを聞いても、ずっと私の友だちでいてくれる？」

「もちろんよ。いったいなあに？」

私は好奇心もわいてきた。

「それが……」

栄子には重大事なのだった。彼女はおずおずと、

「私、父が韓国人なの」と告げた。

「まあ、それがあなたの秘密？」

「そう」

「そんなこと。そんなことで、あなた、悩んでいたの？ 彼と結婚もできないと」

「うん……母は日本人なのよ。で……父と母とはずっと前に別れて、私は母に引き取られ、日本人として育ったの。父のことは、小さいときに別れたので、何も覚えていないけれど……でも、ずっと気になっていて……」

「ふうん、それで、あなたはそのことを気にして、彼が結婚してくれないんじゃないかと、不安なの？」

「うん……」

「じゃ、彼に言ってみればいいじゃない。実のお父さんが韓国人だって。それで結婚してくれなかったら、彼はそれだけの人だってことよ。韓国人だって、別にいいじゃない。昔、日本は朝鮮半島を植民地にしていた。その頃、日本人は朝鮮人を差別していた。戦後もそれはあったかもしれない……でも、もう朝鮮といっても韓国といっても植民地じゃないんだし、そんな差別の歴史には終止符を打つべきよ。あなたが恥じることは何もないわよ」

「そう？」

「そうよ。ね、彼に言ってごらんなさい。きっと私と同じことを言うはずよ」

「そうかしら？」

「そうだってば。とにかく、考えていてもしかたないわね。彼に言うことよ」

私は彼女をたきつけた。

案ずるより産むがやすし。まもなく、彼女から幸せいっぱい電話が来た。

「あ、ありがとう！ 裕子ちゃん。彼、わかってくれたわ！」

「まあ」

「そんなこと、何でもないって。韓国人も日本人も同じだって。彼、そう言ってくれたわ！」

「良かったわねえ、栄子ちゃん。で、あなた、その問題のお父さんとは、会ったことあるの？」

「ううん、小さいときのことは覚えていないし、会っていない」

「会いたくないの？」

「ううん、そりゃ、会いたいわよ。私の実の父親だもん」

「そんなら、会ったら？ 会いに行ったら？」

「……」

「お父さん、日本にいるの？」

「ええ、母の話では、東京でパチンコ屋をしているらしいの」

「結婚式に来てもらったら？」

「ええっ？」

「まあ、驚くことないわよ。実の親子だもの。それとも、彼にまだ気兼ねしているの？」

「そうじゃないけれど……」

「けれどなあに？」

「彼に聞いてみる」

「そう。それがいいわよ」

私はもちろん、彼も賛成すると思った。

そうして、その通り、彼も賛成してくれ、彼女の韓国人の父親も参列し、結婚式は盛大に行われた。

私は参列しなかった。出席を辞退した。精神病院で知り合った友だちなど、公にしない方がいい、と思った。そんなことを考えなくても良かったのかもしれないが。

彼女の結婚後、私はお祝いを持って、二人の新居を訪問した。休日は旦那様と水いらずだろうからと、わざと平日に行った。その頃、病院を退院したばかりの私は、まだ就職せず、家で両親の世話になっていたのだ。

小川栄子から結婚して笹原栄子になった彼女は、エプロン姿もかいがいい、幸福な若妻だった。新居は狭いアパートで、豊かそうではなかったが、幸せはいっぱいあった。彼女は、私に手料理をご馳走してくれた。

台所に立つ彼女。私は、あつと思った。彼女はお腹もふっくらとふくらんでいる。

「栄子ちゃん、もしかして……赤ちゃん？」

「そう！ 凶星！」

彼女はにっこり笑った。

「幸せなの、私」

「そう。良かったわねえ」

「うん」

「旦那様も喜んでくれたでしょ」

「うん、でも……」

「でもって？ 何が？」

「ううん、それが……」

「ねえ、どうしたのよ？」

「それがねえ……」

「どうしたのよ。何か問題があるの？ 何でもないことを悩むの、あなたの悪い癖よ。そんな癖、直しなさい」

「そうじゃないのよ」

「そうじゃないって……」

栄子はエプロンを外して、私の前に座った。そして、

「裕子ちゃん……」

と、私の名を呼んだ。彼女の目から、涙がぼとり、あふれ出た。

「どうしたのよ、いったい……」

私は気がついた。栄子の涙が私に気づかせた。そうだ、そうなのだ……。

「栄子ちゃん、まさか……」

「……」

「先生が、先生が言ったの？ 産んじやいけないって」

栄子はわっと泣き伏した。

「そうなのね、病院の先生に止められたのね」

「裕子ちゃん！」

栄子は泣き泣き、私に訴えた。

「おろせって、おろせって言うのよ、産んじやいけないって言うの、精神病者は子供を産んじやいけないって言うの。その一点張りなの。いくら頼んでも、許してくれないの」

「そんな……」

「ねえ、彼は喜んでくれたのよ。母も、韓国人のお父さんも、良かったねって祝福してくれたのよ。それを、なんで病院の先生が、先生ばかりが、いったい何の権利があって、おろせ、おろせって言うの？」

「……」

「私、もう嫌！ あんな病院に行くの、嫌！」

「栄子ちゃん……」

「嫌だから、もう行かない！ もう通院しないから」

栄子の涙は、真珠のようだった。

自分の身に宿った命を守ろうとする、美しい涙だった。その時、私はそう思ったのだ。

彼女のうつ病は治っていた。通院を止めて薬を止めても、つわりがきても、再発しなかった。そして、五月初め、かわいい女の赤ちゃんが誕生した。それを、私は、彼女の旦那様が電話してくれて、知ったのだった。

「名前は？」

「みどりってつけようと思います」

「ああ、新緑のみどりですね。いい名前」

「ただ、ちょっと……」

「え、何ですか？」

「ええ、それが……どういうことか、ぼくにもよくわからないんですけど……みどりは、産まれてすぐ、大学病院の新生児室に運ばれてしまって……」

「未熟児？」

「まあ、そういうことか、どうか……」

「栄子ちゃん、気落ちしています？」

「いえ、妻にはまだ何も言っていないので……」

「そうですか。私、お見舞いに行ってみます」

私が行ってどうなるものでもなかったが、彼女のことを心配だった。みどりちゃんのことにも心配だった。

産婦人科の病院で、栄子はすやすやと眠っていた。

私が行くと、気がついて、にっこり笑った。

「栄子ちゃん……」

「ありがと。来てくれて。大丈夫よ、私は。産後、うつ病が再発することがあるって、皆、心配するけれど、私は大丈夫。もううつ病は、とうに治ったわ。私は元気」

「そう、良かった」

「もうすぐ退院するの、みどりも家に戻ってくるわ、未熟児なんて、大丈夫よ」

「そうね」

だが、みどりちゃんは、未熟児ではなかった。

退院して、家に帰った彼女から、突然、電話があった。

「裕子ちゃん、どうして？ どうしてなの？ どうして私だけこんな目に遭うの？」

「どうしたのよ、栄子ちゃん、いったい何があったの？」

何もわからずに不審がる私に、栄子は、彼女を襲ったつらい運命を告げたのだった。

「みどりがね、みどりが死ぬの」

「えっ？」

「心臓に奇形があるんだって」

「ええっ？」

「長く生きられないって、助からないんだって」

「……」

「薬が、薬がいけなかったの」

「え？……」

「私が病気になって、薬を飲んでいたら、妊娠初期にうつ病の薬を飲んでいたら」

「それはないと思うけれど……」

「ううん、私がいけなかったのよ、うつ病なんかになって、薬を飲んで、それでみどりは……」

「それは、あなたの思い過ごしかも……」

「違うのよ。みんな私がいけなかったのよ。あんな病気になったんだから、子供を産むべきじゃなかったのよ。結婚するべきじゃなかったのよ」

「そんな……旦那様はずっとあなたを待っていてくれたじゃない。私、どんなにうらやましかったか」

「でも、でも、こんなことになるくらいなら、彼も待っていてくれなかった方が良かったんだわ。そうすりゃ、私もこんな苦しみを受けずにすんだんだわ」

「そんなこと言うもんじゃないわよ。ぼちが当たるわよ」

「もうぼちが当たってるわ」

「栄子ちゃん……みどりちゃんの病気、あなたのせいかどうかはわからないんじゃない？」

「わかってるわよ、うつ病の薬のせいよ」

「そんな……」

「もうダメ、私、ダメ」

栄子は激しく泣いていた。それが薬害だったのかどうか、私は半信半疑だったけれど、彼女は

私の言葉も聞かなかったし、もうそれ以上、私は彼女をどうなぐさめていいか、わからなかった。

旦那様、笹原良二氏が知らせてくれて、私はみどりちゃんの告別式に行った。

親族の席で、栄子はただ泣き崩れていた。見るも痛々しい。どう慰めていいか……皆、わからないのだった。

私は田中病院の医師を、ひどいと思った。医師は薬害があると考えていたのだろうか。それを考えておろせと言ったのなら、なぜ、本人にそれをきちんと伝えてくれなかったのか。

栄子のことを思って、気持ちが沈むまま、四十九日が来て……私は、ふと、小さな新聞記事に目がとまった。

主婦、JRに飛び込み、自殺。

本日午前八時、会社員笹原良二さんの妻・栄子さん（二十四歳）が、JRE線C駅近くで列車に飛び込み、自殺した。このため、JRは、三十分ほど遅れがでた。

あわてて笹原家に電話した。

「栄子ちゃん、自殺したって、ほんとですか？」

「はい」

「まあ！」

「ぼくも、今、警察に行ってきたところです」

「……」

「ぼくが悪かったんです。ぼくがもっと早く栄子を病院に連れて行っていたら、こんなことにはならなかった。悔やんでも悔やみきれませんが、でも、ぼくは……」

「……」

「ぼくは……ぼくは、あんな病院に二度と妻を入院させたくなかった……」

「笹原さん……」

「いけませんか？ 精神病院がいわれなき差別を受けていることは、わかります。でも、でも、病院の方だって、あれでは、差別されてもしかたないじゃありませんか？ ぼくは、間違っていたんでしょうか？」

「……」

「もうぼくは、栄子のお母さんにも、韓国人のお父さんにも、何と言ってわびたらいいか……顔向けできません。やっぱりぼくは、間違っていました」

笹原良二は泣いていた。

精神病院も変わらなければならない。私たち一人一人の力は小さくても、病院を変えていかなければならない。もう二度と栄子の悲劇が起きないように、力を尽くしていかなければならない。

「ぼくは愛していたんです。栄子のこと、みどりのこと。二人を失った今、ぼくは、いっ

たい、ぼくは、どうやって生きていったらいいか……」

「笹原さん……」

返す言葉を失っている私に、笹原良二はなおも男泣きに泣いて訴えた。

「教えてください、裕子さん、ぼくは、いったい、これから先、どうやって生きていったらいいんでしょう？」

とたたみかけるように言って、なお、彼は言うのだった。

「せめてもの罪滅ぼしに、栄子とみどりの二人は一緒の墓に埋葬してやります」

「そうですか……私も、ほんと、なんて言ったらいいか、わかりませんが……ご主人もお力を落とさず、二人の冥福を祈って、強く生きて行ってください」

「はい、そうですね」

そこで電話を終えた。

その後、彼がどういう人生を生きていったか、それを私は知らない。

(4) 性の悩み

(4) 性の悩み

性の悩みは、十代からあった。

未経験で、セックスってどうすることかわからなかったのに、欲望は身の内にうずいていた。早く結婚したかった。

恋愛結婚にあこがれていたのに、相思相愛の相手にめぐりあえなかった二十代。当時、昭和四十年代だが、女性には結婚適齢期というのがあって、二十代初めを逃すと、もう、ハイミスと呼ばれるのだった。

ハイミス……オールドミス……行かず後家。婚期を逸した年増女。何と言われるかわからない。クリスマス・ケーキと同じで、二十五を過ぎると、どんどん価値が下がる。結婚に結びつかない恋愛などしていると、ハイミスになってしまう。私は、片思いばかりしていた。

結婚したかった。結婚すれば、この性の渇きから逃れられると思っていた。結婚しても別の形でこれが続くなど、思いもしなかった。

私には栄子のように待っていてくれる恋人はいなかったし、精神病院に入院して、なおのこと縁遠くなった。でも、あきらめきれなかった。

三十歳を過ぎて、病気のために失業し、私は結婚相談所に行こうと思った。子供をかかえた父子家庭の男性と、結婚してもいい、離婚歴のある男性なら、私を受け入れてくれるかもしれない……子供はほしかった。でも、栄子の悲劇を考えると……みどりちゃんの心臓の奇形ははたしてうつ病の薬のせいだったのかどうか、それはわからないが、ただの運命のいたずらだったようにも思えるが……でも、私は自分で子供を産む勇気は持てなかった。父子家庭の男性と結婚すれば、子供を持てるのではないか、こんな良いことはない、と思った。子供を育てるのは夢だった。

そして、昭和五十一年、私は望みどおり、息子を一人かかえた橋川正造と見合い結婚したのだった。

息子の正一はかわいかった。先妻は、正一がまだ小さいとき、不倫相手の許に走った……ということだった。

「家庭的な人がいい」と正造は言う。家庭的ってどういうこと？ 私は自信なかった。裁縫は苦手だし、専業主婦でずっと家にいるってタイプでもないし……でも、「家庭的」って浮気をしないってこと？ それなら、少し自信あるけれど……。

結婚して、生活の安定は得られた。子供もかわいかった。初めはなついてくれなかった息子だが、時間をかけて接したら、仲の良い母子になれた。しかし……。

私は結婚さえすれば、性の渇きから逃れられると思っていたのだ。その期待が裏切られる。

夫は普通の男だった。セックスも普通にあった。だが……。

セックスって、こんな味気ないものだったのか？

オーガズムって、何だろう？

彼の物が中へ入ると、痛くて、便秘の苦しみたいなのが感じられる。狭い所に太い物が入る……痛いのは当然と思えた。

いったいこれで子供を産むときはどうなるのだろうか？ 女はいつも、痛みに耐えていなければならな

いのか？　それが女というものだったのか？

くちづけにはあこがれていたのに、デープキスなんて、気持ち悪い。

接するとき、夫は「気持ちいいか？」と聞かすが、私は答えられなかった。こんな恥ずかしいこと、なんで気持ちいいか。そしてまた、私は彼に申しわけないとも思った。

セックスに幻滅した。

夫を愛していないからだろうか？　恋愛結婚でないからだろうか？

別に夫を嫌っていたわけではない。嫌いなら、いくら私が結婚に飢えていても、一緒になるわけがない。他に見合い相手がいなかったわけではないのだ。

でも、激しい愛情で彼を求めているからだろうか？

どうしたら、オーガズムを感じられるのか？

私が病院で診察を受けていた医師は、残念ながら男性医師だった。女の悩みなどわからない。そして、その当時、薬害のことなど、わかっていなかった。

私が「オーガズムを感じられなくて……」と訴えても、その医師は、「離婚しない方がいいよ」と言うばかりだった。

三十代。私はずっと悩み苦しんでいた。なんで私はこんなに夫を愛することができないのか。いったいなぜ？……私ってこんな石のような心しか持っていない女だったのか？

彼が「冷たい」と言う。

「男は別にいいんだよ」と、私が文学の師と仰いでいた無名の作家、川田啓介氏は慰めるように言ってくれた。

「男は喜びを感じるようにできているんだ。相手が冷たくても、暖かくても、関係ないんだよ」

そうなのだろうか？　私は、夫に、申しわけないと負担に思う必要はないのだろうか？

でも、誰に言っても、どの友人も私の悩みに回答を与えてくれなかった。

うつ病が恐ろしいのは、私の場合、長く続くと躁病に変わってしまうことが多いことだった。私のうつ病は入院しなければならないほど強くはないのだが、躁病に変わって、またも入院する。

そして、入院すれば躁病はすぐに軽快する。

入院中、気分の安定してきたとき、私は同病者たちに自分の悩みを告げ、答えを求めた。

セックスについて、谷千代子はこう言った。

「私は結婚前につきあっていた彼とは、とても良かったよ。オーガズムはすばらしかった。でも、今、結婚して、夫としても楽しくないね。何の喜びもないね。夫がかわいそうだから、感じているふりはしているけれどね。セックスはテクニックだよ」

大柳春子はこう言った。

「私は、結婚して十年たって、感じるようになった。自分が病気で、夫が支えてくれたのよ。それがうれしくて……十年目に感じるようになったわ」

私にはそんなこともなかった。

少し怒りんぼだけれどやさしい夫に恵まれて、いったい私は何が不満だったのだろうか？

(5) 差別に抗して

(5) 差別に抗して

私は医療不信に陥っていた。いろいろと悩みを医師に相談しても、はかばかしい答えが得られず、薬だけ出される。薬剤師だけいればいい。医師など、いなくてもいいようなものだ。

そして、田中病院はやはり、問題の多い病院だった。薬だけめいっぱいによく出す。

この病院の伊島医師に、私は、

「そんな文句ばかり言うなら、もうここへ来なくてもいい！」と、拒否された。

「君がここに来なくなっても、私は君に何もしない。私は君にこれ以上、何もしようと思わないから、来たくなければ来なくていい。文句ばかり言われるのは、不愉快だ」

とも言われた。

でも、このまま薬を止めてまた再発したら……という不安があった。何しろこの病気は再発しやすいのだ。薬はいろいろあるが、どれも、対症療法にすぎない。この山のように多い薬も、病気を根本から治すものではない。だから止めれば再発する。

しかたないかなあ、と思い、それから二、三回、伊島医師のところに行った。

でも、どうしても嫌になって……止めた。

その頃、私は子育ても一段落し、再就職しようと、とある教材会社の試験を受け、入社した。夫も理解してくれ、仕事もうまくいっていた。昭和五十年代終り頃である。

何も問題ないようだったのに、私は、原因不明の頭痛に悩まされるようになった。

頭が痛い……。

痛くてせつない。

ガンガンする。

こんな痛い頭、取ってしまいたい……とまで思うが、まさか自分の頭を取ってしまえるわけもない。

私が苦しんでいたら、その当時交際していた、田中病院での患者仲間、中原田君子が、渡辺脳神経外科を紹介してくれた。

「あたしが早朝、近所に散歩に行つて見つけたところなんだけど……あたし、眠れなくなると、そこへ行って、薬をもらっているの。渡辺先生って、とっても良い先生だよ」

確かに良い先生だった。

先生は、頭が痛いと訴えた私に、検査してくれた。この当時の検査は、脳波や脳のレントゲンである。

「脳波も脳のレントゲンも正常だなあ」

と医師は言う。そして、

「頭が痛いつて、君はデスクワークをしているんじゃないの？」

と尋ねた。

「はい、教材編集の事務をしています」

「それなんだな、いつも同じ姿勢で机に向かって仕事しているから、肩がこって、頭が痛くなる

んだよ。毎日、肩と首と頭の体操をするといいよ」

と、体操の仕方を教えてくれた。

体操はしてみた。

しかし、そんなことで、この酷い頭痛は治らない。これはもう、私の持病の再発であろう。田中病院でもらった薬のうち、飲まずに残っていたものを試しに飲んでみたら、頭痛は軽快した。

しかし、また不安がやってくる。私はまた、躁病になるんじゃないか？

私は渡辺先生に訴えた。

「自分がまた病気になりそうで……」

「そう？」

「でも、私、田中病院になんて、二度と行きたくないんです。あんな金儲け主義の病院は嫌なんです」

「金儲け主義っていてもね、現状ではしかたない面もあるんだよ。その田中病院というのが嫌なら、他の病院もあるが……」

「どこか、紹介してください」

「いや、私は専門ではないからなあ……」

中原田君子は、精神科と脳神経外科の区別もつかないようだったが、これは専門が違う。私は脳腫瘍や脳梗塞ではないのだ。

渡辺先生はずっと考えていたが、

「病院はいくらだってあるだろう。大学病院とか、国立病院とか」

と言った。

そう言われて、私が行ったのが、JRの電車の窓から見える看板に『心に悩みのある方は、どうぞいらしてください』と書いてあった高橋病院だったのだ。

そこの医師、井上先生に私は田中病院での顛末を告げ、助けてほしいと訴えた。

やさしい先生だった。

私のことをじっと見つめる……それは、医師が、この患者の言うことはどこまで現実なのか、患者は病気なのか、そうでないのか、見極めようとする眼差しなのだが、患者にはそれがわからない。恋している人の眼差しのようによく誤解してしまう。

「わかりました。しばらく会社を休んで入院しましょう」

「やっぱり入院しなきゃダメですか？」

「だって、あなたは頭が痛いんでしょう？ 薬が切れるとまた酷い頭痛になる。それを何とかしたいんでしょう？ 入院して、しばらく……治るまでの辛抱です」

そして先生は、会社に提出する診断書を書いてくれた。

『自律神経失調症のため、三週間の休養を命ずる』と。

自律神経失調症？

あ、私はそういう病名だったのか、とびっくりした。これまで医師たちに病名を告げられたことはなかったが、私は自分で、躁うつ病と思ってきたのだ。

そうだ、私は精神病ではなかったんだ……。

私は長い間の悩みから解放されたように、うれしかった。

ところが、ここに入院したら当然、この先生に診てもらえると思っていたのに、ふたを開けてみると、井上先生は男子病棟の担当で、私が入った女子病棟は、違う先生の担当だった。

この医師が……小林医師が、私には苦手のタイプだった。

心身ともに健康で、自分はぜったいに精神病やノイローゼにならないタイプ。核戦争で世界の終わりが来ても、なお平静でいられるタイプ。と、これは言いすぎかもしれないが、とにかく、この先生は、患者の心の内など理解できない、患者とは違う世界に住む、ごく健全な人なのだった。

私はこれがとても嫌だった。

それにしても、この時の病気は軽かったので、頭痛も、すぐに治った。田中病院では、躁状態が治まっても、退院させてもらえず、うつ状態が始まり、それが固定化するまで退院させてもらえない、というふしぎなことが日常茶飯事だったが、この高橋病院ではそういうことはなかった。私は三週間の入院で退院できた。だが……。

退院しても、すぐには会社に復帰しない方がいい、あと二週間の休養が必要とかで、小林医師が診断書を書いてくれた。病名は『躁うつ病』になっていた。

ひどい、と思った。井上先生は、自律神経失調症と言ったのに……。私は精神病ではないのに。

それに、この診断書では会社に持っていけるはずがなかった。誰が躁うつ病患者など雇うか。私がこの診断書では会社に持っていけないと看護師に抗議したら、小林医師に呼び出された。「なんでこの診断書でいけないんだ？ あなたは、躁うつ病になって、躁うつ病で入院し、躁うつ病の治療を受けて、躁うつ病が良くなったんだ。ほら、ここにも、ここにも、書いてあるだろう」

カルテを見せる。

そして保健所に提出した書類の控えを出して、

「あなたを入院させるには、保健所にこの書類を出さなければならなかったんだ。ほら、ここに書いてあるだろう」と見せる。

私はじっと黙っていた。

激しい怒りがこみあげてきた。この先生は、私を、精神障害者として、国家権力に売り渡したんだ。それがしかたのないことであつたとしても、何も私に見せることはないじゃないか。

当時の私は、保健所も国家権力、と思っていた。

そして、私はあくまでも自分は精神病ではない、と思いたかった。だからそう信じていた。

私がじっと黙っていたので、医師は、

「この診断書でいいだろ。これを会社に提出しなさい」と命令した。

しかし、これは明らかにまずかった。

「何で前と今度とで、病名が違うんです？」

と、女性編集室長に詰問された。

「私たちは、診断書って、権威のある、厳密なものと思っていますよ。それが、肝心な病名が違

っていたりして、おかしいじゃありませんか」

この会社の編集室は大学出の女性で固められていて、編集長と編集室長と上司が二人いた。どちらも女性で、編集長だけでいいのだが、編集室長は社長が労務管理のために置いているのだった。ばかな人だと、社員は皆、笑っていたが、労務管理はうまいのだった。

編集長の方は、皆に信頼されていた。

「明日橋川さんが来るって聞いて、私、一晚眠れなかったの」

と言う。彼女はなんとかことを穏便におさめたくて、

「橋川さん、教育産業はもう、ダメよ。子供の数も少なくなって。橋川さんは才能ある人だから、家で小説を書けばいいのよ。あなたも、ほんとうはそうしたいのに、旦那様から自立したい、女も経済的自立をしなければ、なんて思うから、いつまでも勤めていたくなるのよ」

などと言う。

と、室長がよけいなことを言った。

「躁うつ病だなんて、あなたはそれでよく結婚できましたね」

ひどい！

「私だって年中、病気だったわけじゃありません」

と私は抗議したが、室長は止めなかった。

「なんであなたは病気のこと、履歴書に書かなかったんです？」

「履歴書って、そういうことを書くものですか？」

「そうでしょう」

そして彼女はなおも言う。

「あなたが異常になって、社員が、皆、動揺したんですよ。社長も言っています、お医者さんが『完全治癒証明書』を書いてくれなければ、あなたの会社への復帰は認められない、と」

「お医者様は、『完全治癒証明書』なんて書いてくれません。私は、お医者様に、仕事に戻って大丈夫、という証明書を書いてもらって、会社に復帰しようと思っていたんです」

「まあ、あなたの言うことを聞いていると、まるでお医者様はあなたの希望通りにしてくれるみたいね。そうでしょ、『書いてもらって』だなんて」

人の言葉尻を捕らえるな。

結局、私は、クビ、を言い渡されたのだった。

眠れなくなった。

これは、退院してまだ三日もたっていなかったときのことなのだ。刺激が強すぎ、眠れなくなって、躁状態が戻ってきた。

病院に戻った。

そして、保護室へ。

小林医師たちは、私が興奮しているとして、保護室という名の独房に監禁した。興奮状態が続くから、怒っているから、異常だから、と、一カ月も続けて、監禁した。

私は怒りに燃えていた。確かに激しい怒りだった。しかし、これは、精神病患者への差別に怒

って、燃えているものだった。差別への怒りに燃えるのが、異常なのか？ 「躁うつ病だなんて、あなたはそれでよく結婚できましたね」と関係ないのに言った編集室長への怒りに燃えていたのだ。だから、この怒りは、監禁されるほど、強くなった。これが病気か？

高橋病院の保護室は、田中病院のそれに比べれば、数段、ましだった。ここはまだ改築されていなくて、保護室も白い壁の部屋ではなく、板張りの部屋だったが、ちゃんとベッドも置いてあり、扉で開け閉めする水洗トイレもあった。

それでも、鍵のかかる独房には違いない。

私の怒りは、監禁されて鎮まるわけがなかった。この社会の差別、不条理への怒りに燃えているのだ。

私の怒りを解くことのできない小林医師は、毎朝、私に太い注射をした。一カ月間、毎日、精神安定剤を大量に投与した。私の怒りが、胸の奥に固まってしまいうまで。

怒りが胸の奥に固まってしまっていて、その後、抑うつ状態の長い、苦しい、トンネルが続く。退院はしたが、うつ状態は消えなかった。十年間以上も消えずに、続いた。高橋病院に、小林医師の診察の日を避け、井上先生は違う病院に転勤してしまっていたので、その他の違う医師の許に通院していたが、治らなかった。家庭生活は一応、どうにかやっていたが、抑うつ状態は続く。

普通、うつ状態が強いと、すべて無気力になって、家事もできなくなってしまうのだが、私はそこまでには至らなかった。だが、ゆううつが続く……。

強迫神経症のような状態が続く。さまざまな生活上の不安が酷くて、精神が安定しない。何でも小さいことが不安で、特に外出するとき、電気器具やガス器具の元栓をちゃんと閉めたかどうか、気になって、確認ばかりする。これを言うと、人は、自分もそうだとか、女はそれくらいの方が安全でいいのだとか言ったが、私のはこれが極端に酷かった。確認して、何度確認しても、不安だった。

「もっと酷い人もいますよ」と医師は言う。

「一日中ガス栓の前から離れられないで、外出できない人もいます」

一応外出できるのだから、あなたのは酷くはない、と高橋病院の医師たちは言う。でも、私の強迫症は治らない。夫と一緒に外出するときなど、私がもたもた点検しているので、夫が怒った。

十年間以上もこの状態が続いたので、高橋病院に見切りを着け、新聞で見た記事を頼りに、良い先生だという評判の野木沢クリニックの野木沢先生の所に行った。それまで、この真っ暗なトンネルを、私は抜けられなかったのだった。

(6) 再生のとき

(6) 再生のとき

二〇〇一年（平成十三年）九月十一日、夜。

私は夫と同じ部屋で寝ていた。テレビをつけっぱなしで寝るのは、夫の癖である。

そのテレビの中で、アメリカの巨大ビルが……突然、崩壊した。

特殊撮影のテレビドラマか？

現実だった。

イスラム原理主義のテロリストたちが、飛行機を乗っ取って、巨大ビルに突入、ビルを破壊したのだった。当然、多くの死者がでた。

戦争……。

戦争が起きる！

ブッシュ大統領は、報復を宣言、戦争の準備を始めた。

私は、目の前が真っ暗になった。不安で、不安で、たまらない。いったいこれから何が起きるのだろうか？ 世界戦争が始まるのだろうか？

私は世界戦争の不安におびえていた。

アメリカはアフガニスタンに侵攻する。

アフガニスタンはまだ遠い国か？ しかし、ブッシュは、北朝鮮も悪の枢軸だと宣言した。北朝鮮は、日本のすぐ近くの国だ。

北朝鮮は、日本にキバを向け、核開発に向かって進んできた。

もともと北朝鮮は、日本に深い恨みを持っているはずなのだ。その北朝鮮が……核弾頭を付けたミサイルが、東京に飛んで来ないか？

その不安で、私は神経を壊してしまった。

その上、当時服用していたリチウムという薬で腎臓を悪くしてしまい、その薬は無くなり、安定剤はリントンだけになった。私はずっと調子がいいので、野木沢先生は、リントンだけでいい、と思っただけだ。

ところが、私は薬が減ったこともあって、情緒不安定になってしまったのだ。

こうして私は、入院設備のない野木沢クリニックから、千草病院を紹介され、そこにはベッドの空きがないと高橋病院に回され、逃げ出して……男たちに拉致され、高橋病院の保護室に放り込まれたのである。

高橋病院の白い壁に囲まれた保護室で。

私には、もう、父も、母も、いない。私が長い間、病気で苦しめてきた両親だけれど、また両親に言いたいこともいっぱいあったけれど……母はいつも、お前が病気になって私は苦しんだとぐちをこぼし、私を苦しめた。父は田中病院に面会に来てくれたとき、ちょっとでいいからバラ園を散歩させてほしい、もう閉じ込められて苦しくて、と私が懇願したのにただ悲しそうにじっと私を見つめるだけで、私の気持ちを理解しようとしてくれなかった……でも、私が病院から帰

ると、両親は、いつも、暖かく迎え入れてくれた。入院中にも面会に来てくれた。その父も、母も、今は冷たい土の中である。

そして私は壁の中に閉じ込められている。ここからなんとかして出て行きたい。しかし、出て行くためには、誰か身内が来てくれなければならないのだ。

姉か妹に会わなければ……。姉も、妹も、遠くにしかいないけれど、でも、誰かが来てくれなければ、私はここを出ていけない。

毎日様子を見に来る坂月医師に、
「姉か妹を呼んでください」

と頼んだら、

「今の君を見たら、お姉さんも妹さんも、悲しむだろう」と言う。

姉や妹が悲しむって……。私を壁の中に閉じ込めて、病院のお仕着せのごわごわした寝巻を着せ、足も手も身体もベッドに縛り付けているのは、誰だろう、この坂月医師の命令ではないか。自分がやっていることなのに……。

姉も妹もダメなら、夫を呼んでほしい、と頼んでも、梨のつぶてなのだ。

「面会禁止ですか？」と聞いたら、

「いや、面会禁止ではない」と言う。

でも、誰も来てくれない。

そして

「君は何？ 暴力団に連れてこられたって言っているらしいが」

と、私が看護師に言ったことを、聞く。

「そうです、交番のはす向かいのところだったのに、暴力団が私を捕まえて、ここに連れてきたんです。夫が私をここへ連れてきたんじゃないです。夫はパトカーと一緒に乗って、私を追いかけてきたんです」

私はこう考えていた。精神病院に入院するのを嫌がる患者もいるだろう。その人たちを無理に入院させるため、家族や病院が暴力団に頼んで、無理に拉致してくる……。そういうこともあるのではないかと。私の場合は、それと少し違うけれど。

医師はぼつりと言った「暴力団ではない、あれは病院の職員だ」。が、その時、私はその言葉の意味がよくのみこめなかった。

人は、精神科の医師と聞けば、人の心を理解できる人たちだろうと思うけれど、私は病気になってからの長い年月で、こういう素朴な期待が次々と裏切られていくのを知っていた。

「北朝鮮が攻めて来ないか、不安なんです」

と言った私に、この医師は、

「それは不安だよ。でも、だからといって、人はあなたのようにではありませんよ」

などと答える。

北朝鮮にはそんな力はないとか、戦争にはならないとか、言ってくれても良さそうなものなのに。

夫が来てくれた。医師が夫を連れてきたのだ。

夫はにこにこやさしそうに私を見た。私が少し良くなったので、安心したのだろう。

でも、私は、少し落ち着いたら、またまた暴力団が怖くなってきていた。

「あのね、家の鍵を二重にして、インターホンを取り付けて、外から来た人とは、インターホンで会話するようにして。でないと、私は怖くて、あの家に帰れない」

「なんでそんな？」と医師が不思議がる。

「だって、主人が家にいるときはいいですよ。私一人のとき、誰が来るか心配じゃありませんか」

「あ、そういうこと」

「あの家は、もう、暴力団にマークされているんですから」

「暴力団ねえ」

入院してからもう二週間以上もたっていた。私の躁状態も終わり、おしゃべりもしなくなった。拘束を解いてもらい、保護室から大部屋に出た。

後になって思えば、坂月医師は、かなりのヤブであったが、この当時は、私はこの医師を信頼しようと思っていた。

当直の医師に誤って強い注射をされ、死の淵にまで行った私を、この先生は助けてくれたのだから、と思っていた。退院しても、しばらくはここに通院するつもりでいた。

だから、大部屋に出て、二週間後、退院した後、確かに私はここに通っていたのだが……。

夫と私の関係は、並みの夫婦だった。別に特別な関係ではない。躁状態のとき、私は、離婚を迫ったりしたが、離婚して一人で生きていける経済力があるわけではなかった。

夫は、六十歳で定年退職し、後、六十五歳まで会社の相談役をしていたが、ちょうど私がこの高橋病院を退院した頃、六十五歳で完全に会社を退いた。彼はそれまでに築いてきた地位をすべて失い、部下も失い、肩書きのないただの無職老人になった。六十五歳を過ぎて新しい職に就くのは、難しい。

その不満を、夫は私にぶつけた。私のことを怒ってばかりで、つまらないことでヒステリカルに私に当たる。

夫が私のことを怒ってばかりいるんです、毎日、毎日、ヒステリカルに怒られて、どなられて、私は病み上がりだのにそれを考慮してもらえず、つらいんです、と訴えても、坂月医師は何も言わず、何もしてくれない。夫に相談に来るように言ってくれない。

それなのに、私をここへ連れてきたのは暴力団で、それを妄想だと思えば、夫に聞いてください、あの日の午後、私がこの病院で先生の診察を受け、逃げ出して……その晩、ここに入院させられるまで、いったい私はどこで何をしていたか、その時間、私に何があったのか、夫に聞いてください、と言ったら、医師は、

「ご主人を呼んで来なさい」と言い、

「ぼくは、もう、嫌だからね」とせつなそうに本音をもらした。

ああ、そうか、先生は、わが身がかわいいのか、もし暴力団とつるんでいる職員がいるのなら、先生は副院長なのだから、それを公にして裁かねばならず、それが嫌なのか、と私は思った。嫌だという医師に診てもらわなくてもいい。

私は宣言した。

「診断書を書いてください。私はそれを持って、他の病院に行きます」

「あっ！」と先生は驚いていた。

きっと私が暴力団と思ったのは、この先生がちょっともらしたように、病院の職員なのだろう。私が病院を逃げ出したので、連れ戻しに来たのだろう。

しかし、それで良いのだろうか？ 入院を嫌がる患者を説得する努力をせず、あんな風に暴力で、強制的に入院させていいのか？ それに、なぜ患者が入院を嫌がるのか？ 病院の環境が悪いからではないか。

さて、その翌日。高橋病院から去った翌日。

私は夫に話して、二人で野木沢クリニックに行った。

しかし、高橋病院など、嫌だと訴えた私に、野木沢先生は、

「そんなことを言わないで。高橋病院は嫌だなんて言わないで、その先生のおっしゃるとおりに療養しなさい」と言ったのだった。

なぜお医者さんたちは、自分の利害も関係ないのに、お互いにかばいあうのか。目の前にいる患者より、会ったこともない同業者の方がかわいいのか。

私はまた、夫と二人で、千草病院に行き、一生懸命説明して、ここで受け入れてもらった。前はベッドが空いてないからと入院させてもらえなかったが、今度は通院だけだった。

千草病院は良心的な病院として有名だった。マスコミにも知られている。鉄格子をいち早く廃止した病院である。

そこの長井先生は、初め、

「高橋病院でもらった薬は残っていますね？」と聞いた。

「はい」

「じゃ、しばらく、それを飲んでいなさい。それがなくなったら、こちらで出してあげます」

この先生は患者の診察時間が長く、いろいろ話を聞いてくれた。

一人一人の診察時間が長いので、自分の順番が来るまで、時間がかかる。待ち時間が長い、と、私の不満はそれくらいで、あとは、不満もなく、満足していた。この先生にずっと診てもらおうつもりでいた。だが、先生は、半年後に、転勤してしまう。

その後は、若い加藤医師に引き継いでもらった。

かねがね私は、自分はホルモン異常ではないか、と疑っていた。

母が乳ガンになったので、以前、私は自分も乳ガンになるのではないかと怖れ、乳房に触ってみて……と、左右の乳首から乳汁が少し出る。赤ん坊がいるわけでもないのに、妊娠しているわけでもないのに。これは乳ガンの兆候だろうか？

外科に行って、調べてもらう。

調べてくれた医師は、今は乳ガンにはなっていないが、三カ月後にまた検査に来るように、と言う。その言葉通りに、三カ月後にまた検査してもらい……それから半年後に行って……一年後に行って……乳ガンの検査ばかりしてもらっていた。

そのうち、

「婦人科か、脳外科の問題だなあ」

と言われ、また、

「精神科の薬を飲んでいる？ その薬の影響かもしれないなあ」

とも言われた。

でも、当時、野木沢先生は、私が聞いたら、

「そういう風になる薬もありますが、あなたの飲んでいるこの薬ではそういうことはないでしょう」と言った。

そう言われても、私の乳首から乳汁の出るのは、変わりなかった。そのことについて、わからないまま、四十代になり、五十代になり……。

千草病院で加藤医師に代わってから、

「私、乳首から乳汁が出るんで、ホルモン異常じゃないかと思うんです」

と言ってみた。

「そうですか。検査してみましょう」

と、この先生は、血液検査をしてくれた。

やはり、ホルモン異常だった。

これは高プロラクチン血症といって、プロラクチンというホルモンが異常に多く出て、身体がいつも妊娠中みたいになり、そのため、不妊症になっている。子供ができなかったのは、このせいだったのだろう。わかったときには、もう閉経しており、対策もとれなかったが。

性交痛は、あいかわらずだった。楽しいセックスって、私には縁がなかった。

夫には申しわけなかったけれど、その夫も、年を経て、ED（勃起不全）になった。男の身体の不思議さ……。性欲があって、交渉しようとし、しかし、勃起不全で、できない。夫は、私に、口でペニスを愛撫してほしい、そうすれば元気になれるから、と求めるのだが、私にはとてもそんなことはできなかった。で、セックスレスになって、五十代、六十代になって……。

なぜ私は性の歓びを感じるができなかったのだろうか？ なぜそれほど私は夫を愛することができないのか。悩み続けた。結婚しているのに、性愛のなんたるかを知ることのない一生だったなど、自分がみじめだった。しかし、この無オーガズムも、薬による高プロラクチン血症のせいだったのだ。

六十代で、私は、子宮体ガンの手術をしなければならなかった。卵巣も取る必要があって、もう、子宮も、卵巣も、ない。

短い詩、五行歌を書いた。

愛される

歓びも知らず

手術台に乗りて

女性器を

失う

すべて、遠い過去のこととなった。この人生でし残したこと……子供を産み育てること、そして何より愛し愛される喜びを感じる……それは、もう私には、来ない。たった一度の人生なのに。ここでし残したら、もう、二度と、機会はないのに。普通の結婚ができたことだけでも、幸せというべきか？

いくつか病院を経巡ったが、最後に千草病院に来られたのは良かった。

加藤医師は、初め、私がいろいろ訴えても、薬を減らしてくれなかった。

「内科で、骨粗しょう症と言われたんです。骨折しやすいんです。ここの薬を飲むと、不器用になって、転んだり、倒れたりしがちなんですね。でも、薬を少なくして病気が再発するのは嫌だし、転んで骨折し、寝たきりになるのはもっと嫌だし……」

と泣き声になって訴える私に、先生は、

「今のままでいこう」

となだめる。

しかし、もっと月日がたって、私が落ち着いてくると、

「薬を減らしましょう」

と、減らしてくれた。リントンはなくなり、ロシゾピロンだけになった。

実は骨粗しょう症も、リントンによる高プロラクチン血症の結果だった。後になってわかったことであるが……。

「リントンはなくなったから、もう骨粗しょう症がひどくなることはないのでしょうか？」と聞いた私に、

「じゃ、検査してみましよう」と、先生はまた血液検査をしてくれた。

「やはりプロラクチンが多いですね」

「ロシゾピロンでも高プロラクチン血症になるんですか？」

「そうですねえ……ロシゾピロン、少し減らしましょう」

と、先生は減らしてはくれた。

内科の先生は、骨密度を測ってみて、骨粗しょう症が酷くなっていたら、女性ホルモンを出しましょう、と言った。

でも、女性ホルモンって、乳ガンになるのではないだろうか？ 更年期障害の治療で女性ホルモンを投与すると、乳ガンの危険性が増える、というではないか。

薬に頼ってきた私の人生……これからもこれが続くのだ。薬は副作用が避けられず、毒でもある。怖い。

医学は日進月歩しているから、それを信じるより他、ないのかもしれないが。

千草病院の待合室で、私は高橋病院での患者仲間、佐々木芳子と、偶然、出会った。芳子は再入院しなければならず、そのとき高橋病院のベッドが空いてなくて、田中病院に回され、そこに入院し、その後、田中に通院しているはずだった。

「まあ！ 芳子ちゃん！」

びっくりする私に、芳子はにっこりした。

「橋川さんも、ここに通っていたの？」

「そうよ。芳子ちゃんも？ いつから？」

「もう一年くらいになるかな。田中病院でね、待合室で転んでけがした人がいたの。血を出して。そしたら、事務員がとんで来て、別の患者がティッシュペーパーを渡したら、それで廊下に付いた血を拭いているの。けがした人はほっといて。けが人の血は拭かないし、何の興味も示さず、放っているの。そういう病院だったのね、あすこ。それを見て、私は、もうここには来ない、って決心したの」

「それでここに来たのね」

「うん、ここは有名だし」

「良かったわね」

「良かった。橋川さんにも会えたしね」

診察までまだ少し間があった。

「ねえ、今日は一緒に帰らない？ 喫茶店にでも寄って、お話ししようよ」

と私は誘ったが、芳子は他に用があったのだった。

「私、ここに入院している人に、後で面会していくの。アマテラスで知り合って、交際していたんだけど、彼、入院しちゃったのよ」

アマテラスというのは、ここの敷地内にある喫茶室のことである。

「彼？ 恋人？」

「まあね」

「へええ、ここでは恋人とも面会できるの？」

「そうよ、そんなの、基本的人権じゃない」

「そうだけれど……」

外来に通っているだけではよくわからないけれど、千草病院はかなり進んだ病院だった。

またあるとき、待合室で。

一人の女性が落ち着いて座っていて、

「私は、入院するの」

と言う。

受付の人が来て、

「お父様からそういう話は聞いていませんよ」

「でも、入院したいんです」

「まあ、そう。でも、入院しても、もう良くなったから退院しなさいと言われても、まだまだ入院してたいって、がんばるわけにはいかないのよ」

ここの入院心地はいいらしい。

私は思わず笑ってしまった。

「あら、どんなにいい病院だって、うちにいるほうがいいに決まっているのに。ここはそんなに

すてきな病院なんですか？」

「まあね、ふふふ」

受付の人も笑った。

私も、今度再入院が必要になったら、この千草病院に入院したい。でも、またベッドがないなどと言われ、高橋病院や田中病院に回されたら、それこそ悲劇だ。もう二度と白い壁に閉じ込められるのはごめんだ。これからはもう二度と再入院の必要のないよう、努力しなければならない

。私の一生は、病気との闘いの連続だった。そのために失ったものはあまりに多かった。もう二度と、再入院はしたくない。千草病院の病棟は、患者としてではなく、取材で訪れたい。そんなことができるわけではないのだけれど。